



発行日 平成26年7月8日

発行者

富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

公益社団法人富山県デザイン協会内

TEL.0766-63-7140

執筆 池田美雪 * ミラノ在住

第53回ミラノサローネ国際家具見本市

「貧困から生まれる新しいスタイル - ”ネオナート=新生”」

4月8日から13日までの6日間、ミラノ・ロー国際展示会場にて、第53回ミラノサローネ国際家具見本市（以下、ミラノ・サローネ）が開催された。

この国際展示会の主催者であるCOSMIT社は、昨今の経済停滞の中において、家具業界が今後進むべき方向を下記のように示唆している。

「不況の危機を越え、”ポジティブな貧困”が2014年の家具業界において言及できるでしょう。確かに我々は、長引く経済的不況が与える厳しい現実と直面しています。しかしこの現象を単純に経済的な貧困と捉えるのではなく、そこから生まれる本質的な形に価値を見出す必要があります。例えば、激動する経済の中で”貧困”から生まれたスタイルを”ネオナート=新生”と定義づけることができるのではないのでしょうか。不況から学び、丁寧な建築や製作、厳しい素材選びから、新しい形の贅沢が提供されることでしょう。」確かに、嘆いているばかりでは前進はない。現状を省み、モノを売ることが難しい今だからこそできる大きなチャレンジを行ない、これらの障害を良きチャンスに変えていくことが必要とされているのではないだろうか。

ミラノ・サローネ開催に先立ち、2月12日にはCOSMIT主催により第53回ミラノサローネ国際家具見本市の記者発表が行なわれた。会場となったのは、ミラノ大聖堂に隣接するPalazzo Reale（ミラノ王宮）、過去数世紀にわたりミラノ市の政治を司ってきたこの建物は、現在ミラノ市の運営により、文化と芸術の発信地として活用されている。

会場には、COSMIT社よりClaudio Luti社長、そして親会社であるイタリア家具工業連盟の会長Roberto Snaiidero、および家具部門社長Giovanni Anzani（Poliform社C.E.O）を筆頭に、今年度の併催イベント「Dove vivono gli architetti（現代建築家の自宅を覗き見る）」へ招聘された8人の世界的建築家の中からMario Bellini, Massimiliano&Doriana Fuksus, Daniel Libeskind, Studio Mumbaiの主宰者Bijoy Jainの5人が招かれ、たいへん華やかな会見となった。

毎年テーマを変えて開催されるこの併催イベントは、ミラノ・サローネへの商業的な意味を持っているが、同時にイベントを通して展示会参加企業や、来場者各々が、表層を越えた次元で深く思考するきっかけを与える文化的意味合いを強く持っている。Luti社長は、イベントについて次のように語る。「文化を重んじ、経験を伝え、生活全体のシステムの基準を提案することがサローネ・デル・モービレの一つの課題である。この展示を通して、文化を継承しな



2月12日に、Palazzo Reale内にあるCariatidiの間で行なわれた記者発表会の様子。



ミラノ・ロー国際展示会場へ、4月8日の初日に訪れた業界関係者たち。一日を通して、どのバビリオンも人波が途切れることがないほどの混みようだった。



ミラノ・ロー国際展示会場メインエントランスに貼られた、併催展「Dove vivono gli architetti」のポスター。

から革新を続ける出展企業たち、彼らは生産性に優れ、かつ、国際的レベルにおいてクリエイティブなデザイン・アイデアを世界中の家の基準に適應させる能力に優れているが、彼らにとってもこのイベントは改めて価値を見出すことができる機会となるだろう。」

4月8日(火)、すがすがしい快晴のもと午前9時半、ミラノ・ロー国際展示会場開幕。今年は、見本市会場総面積34万平米、出展総面積約21万平米が使用され、出展社数は1,737社(+サテリテ参加デザイナー650人)と昨年より減少したものの、参加国数は前年同様160ヶ国、来場者総数は35万7,212人(内31万1,781人が業界関係者、前年度比13%増)に達した。また、日本人来場者数(業界関係者数)は過去最高の5,728人を記録し、前年度比18.8%増。世界ランキング(イタリアを除く)10位に入り、近年のミラノ・サローネに対する日本人の興味の高さが伺える。

今年は、第53回Salone Internazionale del Mobile、第27回Salone Internazionale del Complemento d'Arredo(インテリア小物)、第17回Salone-Satelliteに加え、隔年開催される第20回EuroCucina(キッチン関連)、第6回FTK-Technology For the Kitchen(EuroCucina併催イベント)、第5回 Salone Internazionale del Bagno(バスルーム関連)が開催された。

Dove vivono gli architetti - 「現代建築家の自宅を覗き見る」

EuroCucinaが開催された9号パビリオンの内部では、1,600平米という巨大な展示空間を用いて、映像インスタレーション「Dove vivono gli architetti (現代建築家の自宅を覗き見る)」が併催された。

建築・デザイン雑誌などに頻繁に取り上げられている世界レベルの8人の建築家-坂茂、Mario Bellini, David Chipperfield, Massimiliano&Doriana Fuksas, Zaha Hadid, Marcio Kogan, Daniel Libeskind, Bijoy Jain (Studio Mumbai)が、東京、ミラノ、ベルリン、パリ、ロンドン、サンパオロ、ニューヨーク、ムンバイにある各々の自宅を紹介しながら「住居を設計するとは」というテーマをめぐり、各自の想いを熱く語るインスタレーションである。

映像インスタレーションは、一人一人の建築家に割り当てられたスペース内に、ビデオ映像と独自の音響が閉じ込められ、一つの単独のアートのスペースとして表現された。インスタレーションを手かげたのは、アート・キュレーターであるFrancesca Molteniと舞台芸術家Davide Pizzigoniの2人、世界各国8つの都市を回り、建築家たちが抱く、「住居」を発端とした都市とその風景そして新しい生き方への考えが、インタビュー形式で紹介された。

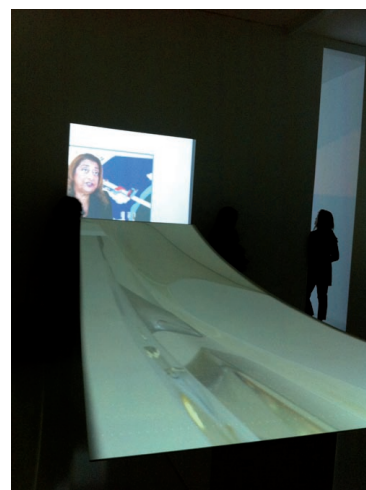
いずれのインタビューも、都市の中で建物とその環境を形成する責任を担う建築家たちが、それらに対しどのような姿勢で生きているかを知る手がかりとして、とても興味深い内容であった。坂茂は「私は飛行機の中で暮らしているが”羽根木の森”という名の住居も1軒持っている。」と、必要最小限のものと自分自身にとって意味のあるモノのみが置かれた、ミニマルな自宅を紹介。また、ミラノの中心地に居を構えるMario Belliniは、「私の住居とは、たいへん背が高く、非常に大きい本棚である。」と、いかに書籍が彼自身の人生の中で重要な位置を占めているかを語る。グランド・ゼロやベルリンのユダヤ博物館の設計などを手がけてきたDaniel Libeskindは、「住居とは、単純な抽象物以



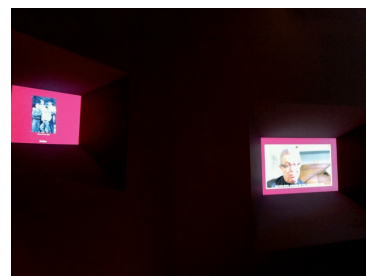
「Dove vivono gli architetti」会場中央に展示された模型。



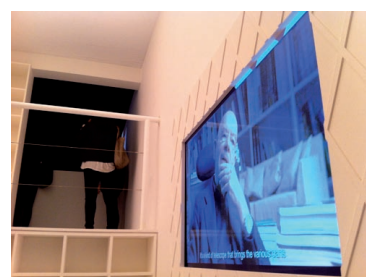
「羽根木の森」にてインタビューに答える建築家坂茂。



スクリーンの手前にはインタビューに答えるZaha Hadidの建築作品が同時に投影された。



Daniel Libeskindは、小さい頃に家族と過ごした町の思い出を語る。



「住宅は本棚である」というMario Belliniのブースでは、来場者が階段を上り下りする空間構成が作られた。

上のものであり、道路や住居を囲む環境そして人をも意味する。」と断言する。

これら8人の建築家の中でも一番印象に残ったのが、StudioMumbaiを主宰するBijoyJainの思想である。東洋的思想が西洋諸国から求められている証とも捉えることができるのだが、彼は17年前にインド西部の海に面したムンバイ市で、StudioMumbai共同プロジェクトを始めた。彼の下には固定のスタッフはおらず、臨機応変にその時々プロジェクトの種類や特性に応じて、家具の制作に携わる職人、あるいは設計に携わる若者などの参加を募るシステムを採用している。これは、人それぞれが持つ経験や技能をよりよく生かすことに繋がり、その結果、制作されるプロジェクトのクオリティーの向上に結びついていく。ジャングルの中のように緑と水の多い彼の自宅兼ストゥーディオについて、BijoyJain自身は、「自分の住居ではなく制作に携わる皆の住まいである。この広大な敷地は自分の持ち物ではないが、大切に手入れを怠らず使っていくという精神が大事だ。私と”水”との関係は絶対的であり、”水”は生命の源。”水”から発生したすべてのものは”水”に帰る。」と語る。ここに、環境と物と人間とを有機的に結びつける原点があると感じた。

サローネ・サテリテ

第17回サテリテのテーマは、「デザイン、イノベーションとクラフツマンシップ」。会場には昨年のテーマに引き続き、伝統工芸である織物、セラミック、皮革とデジタルの職人たちが彼らの手仕事を披露する特別ブースが設けられた。初回より長年サテリテを監修してきたグリッフィン女史によれば、「サテリテは将来、デジタルマニュファクチャーの時代が到来すると予測しており、それに先駆け、すでに3Dデジタルを伝統的手工業として見なしている。」ということである。

詩的、機能的、エコ支援、外見の美しさ、気品、これらが厳正な作品審査を通過し、32ヶ国より集まった650人の若手デザイナーたちが作品に込める要素である。毎年ながら、作品の完成度の高さ、発想の柔軟性、エコ支援の素材の選び方と使いかたなど、非常にクオリティーが高いことに驚かされる。

今回で6年目を迎えるサテリテ・アワードのテーマは、隔年開催される今年度の展示会に併せ、キッチン関連とバスルーム。

大賞には、イタリア、ドイツ、ポルトガル出身の3人グループFROMが制作した、キッチン用のLED光源使用の照明器具「Volta lamp」が選ばれた。照明角度を上下に変えられる機能がついた円柱形のシンプルな照明器具には、ボルト数が低いLED光源の利点が最大限に生かされている。フォームと機能性を堅実にシンプルかつ直感的にまとめたことが大きく評価された。

2位には、フランス人Arturo Erbsmanが制作した照明器具「Atomos」が選ばれた。「水」をテーマに蒸留水とLEDの光と熱の照明パフォーマンスが評価された。3位にはアメリカのデザイングループAVANDIが制作したキッチン用はしご「Stepstool」が選ばれた。高さの違うカウンターに対応し、軽く、すべり止めのゴムが付いており、また、壁に立て掛けてタオル掛けにもなるという、機能性に優れている点が評価された。

これら上位3位に加え、今回は特別賞が2点選ばれた。1点は、ルーマニア人Ruxi Sacalis制作による食器「Chamotte」、もう1点は、日本人グループYOY制作のクリップ付きトレイ「Protrude」である。



「水は生命の源」というBijoyJainのブースでは、映像と水と光の構成が独特の空気を醸し出している。

展示の様子は、こちらのビデオからご覧下さい。
www.youtube.com/watch?v=Xu-v6aGF4tU



伝統の織物技術を紹介する特別展示ブース。



サテリテ・アワードへの参加作品の展示風景。



サテリテ・アワードを獲得したデザイングループFROMのブース。

賞には選ばれなかったものの、デザイン性や発想に優れている作品が多く出展されたが、その中で日本人グループ「今人」が出展した作品群は、日本の伝統工芸のリ・デザインへの試みを表現している。例えば繭の廃材を再利用して編まれたバッグは、絶滅の危機に瀕している伝統技術を復興させるきっかけとなるのではないかと感じた。また、同じく日本人グループKAPPESが発表したMOMENTumは、デザイナー自身が言うように、特に機能は持たない家具である。が、白い円錐の外縁から規則的にこぼれ落ちる複数の水滴が、円錐の画面上でスパイラルを描いて中心の穴へ向かう途中で織りなす幾何学的な動きは、たいへん安らぎを与えるセラピー効果のあるすばらしいアイデアである。



サテリテ・アワードを受賞した、デザイングループ、FROM制作の「Volta Lamp」。



日本人デザイングループ「今人」。中心に展示されたカゴは、絹糸の製造過程で廃材となる、ごまごの素材を再利用したデザイン。
www.imagine2009.net



2位を受賞した照明器具「Atomos」。
www.arturoerbsman.com



3位を受賞したキッチン用はしご「Stepstool」。
www.avandistudio.com



KAPPESが魅了するセラピー・デザインMOMENTum。
www.kappes.jp



特別賞を受賞した食器シリーズ「Chamotte」。
www.ruxisacalis.com



特別賞を受賞したクリップ付きトレイ「Protrude」。
<http://yoy-idea.jp>



去年サテリテに出展された作品「Acqua Alta」がMOROSO社から新製品として発表された。

フォーリ・サローネ

ミラノ市内でミラノ・サローネと同時に開催されたイベント(通称フォーリ・サローネ)は、市内の7つのエリア(Tortona, Triennale di Milano, Brera District, Fabbrica Del vapore, Porta Romana, Ventura Lambrate, Porta Garibaldi & Corso Como)を中心に、その数はなんと986ヶ所に及んだ。商業的意味あいの強いBrera Districtでは、各ショールームがあでやかな新作発表を行ない、またTortona地区では大企業が魅力的なパフォーマンスを繰り広げた。

その中であくまでもマイペースにオーガナイズを続け、今年もデザイン通の心を捉えたのがVenturi Lambrateである。実験的でクリエイティブ性の強い若手デザイナーの展示が集中する地域であるが、今年は年ごとに増えるリクエストに応えるべく、広大なスペースを持つ旧工場のいくつかが展示会場として解放された。リクエストの多くはイギリスやオランダそして北ヨーロッパからである。それ故か、一見すると野外マーケットのように感じられる空間構成だが、各々の展示空間がゆったりとしており、それぞれの持ち場に自由に作品展示がなされ、見る方も作品の細部までじっくりと堪能できる不思議な空間が生まれた。会場内や屋外にはオーガニック素材を使用した臨時のバーやレストランが設けられたことも、このエリアの雰囲気盛り上げる一つの演出であったといえる。

ミラノ・トリエンナーレはミラノ・デザインのメッカであるが、今年も計31の文化色の濃い展示が行なわれた。

シチズン社は、エントランスのすぐそばに位置する最上のスペース内で、「LIGHT is TIME」と題したインスタレーションを行なった。インスタレーションを手がけたのは、パリを拠点に活躍する若手グループDGT。ビッグバンの後、地球では太陽の光が昇って沈みそして闇に移行することによって、人類に「時」という概念が生まれたことを表現する。天井から細いワイヤーでつり下げられた無数の雨滴のように見える小さな時計内部のパーツがキラキラと輝く。照明が強くなり、消え、時が刻まれる。圧巻のインスタレーションであった。

ミラノの歴史と文化を紹介するインスタレーション「Identità Milano(ミラノのアイデンティティ)」では、ミラノの街がどのように発祥し、また、形成されていったか、そして歴史の中からどのような文化人が誕生したのかを展示すると共に、ミラノで活躍するデザイナーとアーティスト21人がミラノのアイデンティティをイメージしたペインティングを展示。これらのペインティングはEXPO2015の前イベントとして、ミラノ・サローネ終了後に、ミラノ市中心部のいくつかの広場にて巡回展示された。会場のアートディレクションおよび空間デザインは、世界的に活躍するデザイナーMichele De Lucchiが手がけた。

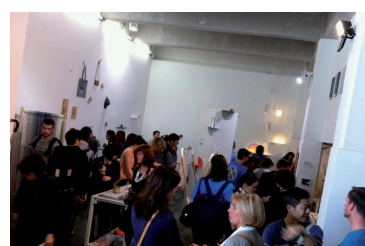
年々増える参加数に比例して、イベントの焦点が曖昧になることが避けられないフォーリ・サローネだが、この状況を引き締め、イベントに新しい意味付けをする試みとして、4年前にアソシエーションELITA主催による「ミラノ・デザイン・アワード」が誕生した。新聞社La Repubblica、Internet Explorer、デザイン学校IED、Future Concept Labとfuorisalone.itが協賛し、フォーリ・サローネ期間中の唯一のコンテストとして注目を浴びている。対象となるのはミラノ・デザイン・ウィークに参加するすべてのエキシビジョンと展示作品である。大賞の他に、ベスト・テクノロジーやベスト・サウンドなど5つのセクションごとの賞も設けられている。その中で今年のベスト・サウンドとベスト・エンターテインメントの2つの賞に輝いたの



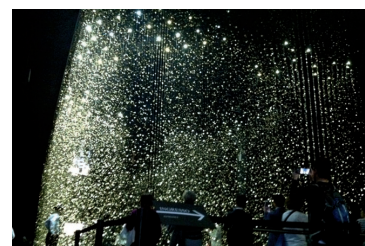
Ventura Living Room展示会場内に設けられたレストラン。



広々とした旧工場のスペース内に個性豊かな作品が展示されている。



BERLIN DESIGN SELECTION 2014の展示会場の様子。



シチズン社が行なった、圧巻のインスタレーション。光が灯されることでその姿を現す、無数の時計のパーツ。会場の様子をシチズン社サイトからご覧下さい。

www.citizenwatch-global.com/milanosalone/2014/jp.html



「Identità Milano」の会場中心に展示されたアート作品。



ミラノ・トリエンナーレでの企画展「イタリアンデザインのアイコン」。

は、自社製品により観衆を興奮へ巻き込んだ点が評価された、前述のシチズン社のエキシビジョンである。過去には、企業とデザイナーの最優秀コラボレーションとしてCanon社とTorafu建築設計事務所、Panasonic社と平田晃久建築設計事務所、またMoroso社とデザイナーPatricia Urquiolaが受賞している。

数多くのエキシビジョンの中から今年の大賞を獲得したのは、スイスの美術学校ECAL(Ecole Cantonale d' Art de Lausanne)のエキシビジョン“Delirious Home(狂気の住宅)”。コンセプトをインパクトのあるビジュアルで表現し、各々の作品の詩的なデザインがリサーチとアイロニーそして機能性としてしっかり結びついている点が評価された。出展作品は、インタラクション・テクノロジーを実験的に使ったインテリア小物で、見るものを笑いに誘うアイロニー一杯のデザイン。

雑誌INTERNIが1991年に始めたフオーリ・サローネを象徴するのは、街の中心部にあるミラノ国立大学キャンパス内で毎年開催される、インスタレーションとイベントである。今年は、「FEEDING-NEW IDEAS FOR THE CITY」と題し、デザイナーPaola Navoneや建築家隈研吾、Torafu建築設計事務所など大御所たちが大規模なインスタレーションを制作発表した。日中には彫刻的に見える大きなインスタレーションだが、夕方にはライトが加わることでその姿を変え、広いキャンパスいっぱいに、来場者を驚かせていた。

来年2015年は、ミラノでEXPOが開催される年。ミラノ・サローネへも、今年以上の参加が期待されている。



体の動きと同じ動きをする時計の針は、ECALの学生作品。

すべての作品が紹介されているビデオはこちらからご覧ください。

www.polkadot.it/2014/04/15/milano-design-award



ミラノ国立大学に展示された建築家隈研吾のインスタレーション。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住

主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる

設計外に携わったプロジェクトとして

”do it jubunde”展(無印良品、ニコレッタ・ブランズィとのコラボレーション)を企画ならび実現

”Soundesign”展(Marangoniファッションスクール主催)にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌“ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

“TuPlay”展にてグラス楽器”FASOLA”を発表

「Bicarbonato : mille usi per te e la tua casa」執筆 (FAG出版社より)

(イタリアの生活に密着した重曹の活用方法を書き綴った本)

“B.A.C.”展(City Art ギャラリー)にて、インスタレーション”Ma.Ma.Ma”を発表

“Made in Bovisa”(Bodio小学校の子供たちとのプロジェクト)を起案、コーディネイト

クリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳

昨年10月にスタートしたデザイン・プロジェクト”stu-art”の立ち上げおよび推進に、コーディネイターとして携わる